

英語教師としての授業観の変容

—自己の定期的な振り返りと同僚との協働的なリフレクションを通して—

翠川 祐輔 高度教職開発コース

キーワード：主体的，授業観，リフレクション

1. 研究の動機

3年前、附属松本中学校へ赴任し、同僚の英語の実践に触れ驚いた。子ども達が何とか自分の思いを表現しようと伝える姿、英語を話すことに楽しさを感じ笑顔で会話をする姿に感銘を受けた。私の授業では見られない、子ども達が自ら表現を求め、自分の思いを言葉にしていく姿がそこにはあった。子ども達の輝いた目、何よりも主体的に学んでいる姿に感銘を受けた。私の授業でもそのような子どもたちの姿に出会いたいと思い、「子どもたちが自ら表現を求め、自分の思いを表現していく英語の授業」をテーマに、授業実践を行った。子どもの思いを大切にすれば良いと頭では理解し、構想を練って実践するが、その中で生徒の姿は、私が願う姿とは程遠いものだった。「どうすればいいのか」と悩み、苦しい日々が続いた。

そんな私の転機となったのは、授業後の同僚の先生とのリフレクションである。話し合う中で、自分とは違う視点からの指摘に新たな発見や気づきが生まれた。相手意識を大切にすることで、自ら表現を求め、思いを言葉にする生徒の姿に出会えるのではないかと取り組んできた実践であったが、その記録を見返すと、同僚との協働的なリフレクションを通して、私自身の英語教師としての授業観が大きく変容していることを実感している。

そこで、本研究は、英語の授業において、「子ども達が自ら表現を求め、自分の思いを表現していく姿」に出会うために実践を重ねてきた教師が、授業後に同僚の先生とのリフレクションを通して、自身に起きていた変容と実践後も定期的に自身の実践を振り返ることによって起きた英語教師としての授業観の変容について考察することとした。

2. 研究の方法

- (1) 「子ども達が主体的に表現を求め、自分の思いを表現していく姿」に出会う為に、授業実践をしていく。
- (2) 実践後の同僚の先生方とリフレクションを通して、自身に起きていた変容と実践後も定期的に振り返ることによって起きた自身の授業観の変容について考察する。

3. 実践事例

3.1 目的意識を明確にしていくことが必要だと気付いた私【2019-8 実施】

子ども達が「自ら表現を求め、自分の思いを表現していく姿」に出会うためには、どのような支援が必要なのかを考えることから、私の実践は始まった。当時の私は、子ども達が伝える相手と目的を理解すれば、主体的に表現を求め、自分の思いを表現していく姿に出会えるのではないかと考えていた。そこで、健康的なお弁当のおかずのレシピを知りたいALTの為にレシピを作成する実践を行った。レシピを作成していく過程で、ある生徒の「このレシピで実際にALTがおかずを作れるのだろうか」との振り返りをきっかけに、自分レシピでクラスの友に実際におかずを作ってもらうことが決まった。この経験を通して、切り方や計量など、このままのレシピではALTの先生に伝わらないことを実感し、「輪切りや千切りって英語で何て言うのだろうか」と自ら表現を求めていく生徒の姿に出会うことができた。子ども達が、自ら表現を求める姿は今までの自身の実践では見られなかったため、そのことに私は大きな手応えを感じた。しかし、同僚の先生方とのリフレクションで、「確かに自ら表現を求めていると思うけれど、もっとALTに健康的になってもらいたいという思いが子ども達に表れてもよかったのではないか」と意見をいただいた。スタートはALTに健康的になってもらいたいと始まった実践であったが、私自身も表現の正確性や命令文を学ばせることばかりに目が向いてしまっていた。そのため子ども達がなぜそのレシピを選んだのかにも注目できず、この単元の本来の目的であるALTの先生に健康的になってもらいたいという思いが薄れてしまっていたことに私は気が付いた。目的意識を明確にすることが課題であるとの時のリフレクションで、私は考えていた。

3.2 表現の正確性だけしか見ていないことに気が付いた私【2019-12 実施】

前回のリフレクションで目的意識が薄れていたことに気付いた私は、目的意識を明確にすれば子ども達は何のために活動をしているのか見失わずに取り組むことができるだろうと考えた。そこで来年の夏に松本を訪れるALTの兄に松本を紹介するという目的意識のもとで、実践を行った。子ども達は、松本の有名な食べ物や場所などをまとめたパンフレットを通して伝えようと考えた。単元が進むにつれて、同じ松本の場所や食べ物を紹介する人はどのような内容を紹介しようとしているのかやどのような表現を用いて紹介しようとしているのか気になり始めた姿があった。その中で、同じ事柄を伝えようとしても、内容に違いがあることに驚いたり、「Do you know～？」という表現を自ら取り入れたりしていく姿に出会うことができた。

「Do you know～？」という表現を求め、自分の紹介文に生かそうとしていった姿を「自ら表現を求め、自分の思いを表現していく」姿であると捉え、私は満足していた。その後のリフレクションで、「子どもが英語を話す楽しさを感じていたのか。子どもの思い・願いを大切にするとやっているが、何を大切にしているんだ。最後に生徒が、自分の書いた紹介文を読んだとき、あなたは自分が何を言ったか覚えていますか」と問われた。私は、その時、何も答えることができなかった。私が子どもにかけた言葉は、「はい。ありがとう。」であった。このリフレクションを通して、私は、子どもの紹介しようと思ったことや内容に目を向けることができている自分に気が付いた。私は今まで、英語の表現を獲得して

いるということにしか着目せず、なぜそれを伝えたいのか、なぜ「問いかけ」の表現を自分の紹介文に取り入れようと考えたのか、子どもの思いを考えることはなかった。

三ヶ月後、当時の私を振り返った記録には、「子どもが、どのような思いをもってそのものを紹介しようとしているのか。子どもの思いに寄り添うことができている自分がいた。今もしやり直せるのならば、どうしてその場所を紹介したいのか、どんな良さを伝えたいのかを子ども達に聞いて見たい」と書かれている。表現の正確性しか見ていなかった私が、徐々に子どもの内面に目を向けようとしている。

3.3 目の前にいる子どもと向き合うことの意味に気づき始めた私【2020-2 実施】

子どもの思いを大切にすることはどういうことなのか。どのような支援が子どもの思いを大切にしていると言えるのか。迷いを抱えたまま、3回目の授業に臨んだ。

A L Tの兄から、ガイドブックのお礼のビデオレターが届いた。このビデオレターには、ガイドブックへの感謝と日本の歴史に興味があることが語られていた。A L Tの兄が、日本の歴史に興味があることを知った子ども達は、日本の歴史上の人物を紹介しようという願いの基、単元がスタートした。単元が進むにつれて、子ども達は紹介したい日本の歴史上の人物を決めだし、どんなことを紹介できるか考え、内容を検討していった。内容を検討する授業の導入場面で、何気なく聞いた「Why do you introduce this person?」という私の問いかけに、ある生徒は、「Because he makes…日中共同宣言」と答えた。授業後のリフレクションで、「Why do you introduce this person?」の答えに子ども達の思いや願いが表れるのではないかと意見を頂いた。私は、このリフレクションから「子どもの思いを引き出す」ことが子どもの思いを大切にすることだと思い、「なぜ」「どうして」という発問の答えにこそ子どもの思いが表れると考え、チーム演習で発表した。しかし、チーム演習では「なぜ、どうしてと尋ねることじゃなくて、子どもと英語で伝えたい良さを共に味わうことだって、子どもの思いを大切にすることではないのか」と指摘された。私は、子どもが伝えたいものの背景にある思いに目を向けることができている自分に気が付いた。当時の私のリフレクションには以下のように書かれている。

英語が話されていること、書いていること安心感がある。そういう目線でしか子どもをみていない。「子どもの思いを大切にすること」は、子どもが伝えたいものの背景にかんじていることを、その文脈を大切にすることなのかもしれない。

今までの私は、教師のはたらきかけだけで「自ら表現を求め、自分の思いを表現していく姿」にさせようとしてたことに気が付いた。子ども達が話す内容に目を向けず、英語を話していればよいという姿勢で授業に臨んでいた私の授業観に当時のリフレクションで気付くことができた。

3.4 子どもの思いや背景に目を向け、授業に取り組んだ私【2020-11 実施】

子どもの根底に流れている思いや願いは何なのか。子どものもつ背景から、授業の題材を考えていくことから始めた。今年度の夏に松本を訪れる予定であったA L Tの兄が、松

本にこれなくなってしまう事実に出会い、外国にいても松本を感じてもらいたい、そのために何ができるだろうかという生徒の思いを基に実践を行った。

ある生徒は、縄手通りのたい焼きについて伝えようと考えた。なせたい焼きを伝えたいのか気になった私は、「Which is the best? I think anko is the best for me.」と尋ねた。彼女は、「Apple cinnamon」と答えた。彼女は、お気に入りのたい焼きの味を紹介し食べてもらいたいという思いをもっていると考えた。そこで、「I see. You want ALT's brother to eat Apple cinnamon's taiyaki.」と返した。彼女は、頷きながら「うんうん。」と答え、「All the taiyakis are very delicious. Be sure to eat taiyaki. I recommend taste is アップルシナモン's taiyaki to you.」と文章を書き出した。今までの私であれば、このように彼女に語りかけることはできなかった。ここまで実践とリフレクションを繰り返してきたからこそ、彼女の思いに寄り添うことができたのだと思う。1ヶ月後、当時を振り返る私の振り返りには、「8月や12月の自分の生徒への語りとは大分違うと感じる。今の自分なら、頷いた彼女にどうやってそのおいしさを伝えていくと尋ねてみたい。」と書かれている。「尋ねてみたい」という表現からは、自分が教師として子どもの思いや考えを聞きたいと考える授業観に変化が表れた。

4. 考察

「子ども達が自ら表現を求め、自分の思いを表現していく姿」に出会う為に、実践を行っていった。そのような子どもの姿に出会うために授業を実践し同僚の先生方と振り返る中で、私の授業観に変化が表れた。当初、私は子どもの姿をみながら授業を構成していくというよりも、教師の思いが強く現れた授業を行っていたにちがいない。同僚の先生方とのリフレクションを通して、英語が話されていることに安心し、子どもが話す言葉の背景にある思いを聴こうとしたりはしなかった自分に気が付いた。そこには、「子どもの思いを大切にすること」を大切に考えながらも、正しい表現が使えたかで判断したり、自分の考えた構想の中で子ども達を動かそうとしている自分がいたのだと感じている。しかし、今の私は「この子はどのような考えをもって〇〇と言っているのだろう」「〇〇さんが語った・書いた言葉には、どのような思いや背景があるのだろう」と言葉の奥にある子どもの背景や思いを大切にしようとする姿勢に少しずつ手応えを感じている。授業実践と同僚の先生とのリフレクションや自己の定期的な振り返りの中で、様々な授業観と触れ合い、私の授業観を見つめ直すきっかけをもらうことができた。

5. 終わりに

私の授業観は2年前と大きく変わった。これは、絶えず変化していくものであり、今も私の中で変化を続けている。この変化は、この先、私にたくさんの新たな発見や自分の更新を促していくだろう。